

サービスマーケティングで学んだこと

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 武藤 友香

活動先：NPO 法人 菜の花 放課後児童クラブ こどものいえ

ゼミ：野尻 紀恵 先生

私は今回のサービスマーケティングにおいて、学童保育の在り方について考えるきっかけを得ることができた。活動に入る前は私自身が学童を経験したことがないので、現場がどのようなものなのかとても気になっていた。実際見てみると、想像していた部分も想像していなかった部分もあった。想像していなかった部分を具体的に言えば、今の子どもたちの



遊びの傾向や食べ物の好き嫌い、性格などだ。家に引きこもりがちだと言われている現代の中で、こどものいえの子どもたちは比較的外遊びを好んでいるのではないかと思った。また、わがままを言ったり、物事をストレートに言ってしまいがゆえに、他人を平気で傷つけてしまっているといった場面に何度か遭遇した。これはあくまで私の個人的な考えだが、核家族やひとり親家庭が増えてしまっている中で、自分でやることや他人を思いやることの場面が生活の中

で確立されていないのではないかと思う。言って良いことと悪いことを教える場が家庭だけであるのか、と少し疑問に思った。そして学童では道徳的なことをどこまで教えなければならないのか、むしろこれは学童が教えなければならないのか、と考え続けた。

こどものいえでは、乙川小と乙川東小の子どもたちを預かっていて、子どもたちの意見を尊重し自主性を育て、間違っていることがあればそれを正して、子どもたちがのびのびと過ごせるような環境を作っていた。この学童は私が理想としていた学童に近いと言える。そして2人の指導員と数人のボランティアの方々によって成り立っている。サービスマーケティングでは自分たちが考えた企画を楽しんでもらったり、小学校が夏休みの間は一緒にプールに入って遊んだり、学校が始まってからは帰ってきた子どもたちの宿題を見守った。

気づいた点を挙げるとしたら、現代の子どもたちも物事に興味や関心が持てたら没頭することができるということだ。企画の最中に、子どもたちから「めんどくさい」と何回か言われたが、自分たちの声掛け一つでやる気を見せて



くれた場面があった。もし子どもたちに何かしてほしいことがあるならば、頑なに「これやりなさい。」「あれしなさい。」と言わずに、大人の側が少し工夫して、子どもたちに声をかけていくことが大切だということに気づかされた。

サービ斯拉ーニングにおいて自分の中での変化は、「子ども目線で物を見る」「子どもたちに対して大人でいること」、この二点について、以前より気を付けていけるようになったということだ。特に子どもを預かる側だということで、子どもたちの身に何か遭ってからではいけないため、対策を常日頃から考えなくてはならない。大人には危険認識がなくても、子ども目線で見ると危険な場所や場面だったりする。逆に自分たちが危険だと認識していても子どもたちが危険だと認識していないことに関しては、子どもたちに教えて次からは気を付けるように促す必要がある。後半からは、ただ一緒に遊んでくれるお兄さん・お姉さんではなく、子どもたちを守る指導員としてサービ斯拉ーニングに臨むことができた。

地域との関わりに関してだが、このこどものいえは先ではなく数人のボランティアの方々が毎日交代で運営している。ボランティアの方の他に学童の近所にお住まいの方も時々こどものいえに顔を出して、子どもたちの世話をしている。他の学童の実態はわからないが、こどものいえには小さいがこのような地域との関わりがあることがわかった。

サービ斯拉ーニングの活動をすべて振り返ってみて、企画に関しては、準備や時間配分、安全確認、子どもたちに参加してもらえるような声掛けの大変さが自分でやってみて身に染みた。しかし、「ま」った声を子どもたちから聞けたときは本当に嬉しかった。そして私は以前にも増して子どもに関して興味が湧き、このこどものいえのような学童がもっと増えたら、子どもたちには嬉しいことだろうと思った。正確には、今回指導してくださった指導員さんのような考えの基で運営していく学童が増えたら、これからの子育て環境はよくなっていくのではないのかと考えた。しかし、半田市で学童を必要とする子どもの人口に比べ、学童の数は追いついていないようだ。学童にも定員はあるし、すぐに入れるわけでもない。その地域にある問題をしっかり見定めて、地域はその問題に取り組まなければならないと思う。この活動をする前は、面倒だなと何回も思ってしまった、グループのメンバーに迷惑をかけることが実際多かった。しかし、活動を重ねていくうちに子どもたちとの時間が楽しくて、一緒に遊んでいると時間があっという間に過ぎていた。そして、最終日を迎えた日には「もうここに活動には来ないのか」「子どもたちと遊ぶこともないのか」と思い、とても寂しくなった。おそらく、私のように思っている後輩はいると思う。その人たちにサービ斯拉ーニングの楽しさや大切さを私の体験を通してしっかり伝えたいと思った。

